

山陰の「小さな文化」を楽しむ

ひだまりのおと

第1号 2019

特集：「つなぐ」





■ 木空風&カフェ・ドリ にて

目次

巻頭 錦織良成 (映画監督・脚本家) 講演「先入観との闘い」 1

特集 「つなぐ」

木次線を残したい (雲南市・奥出雲町) 2

都市につながる山王寺の棚田 (雲南市) 8

風の吹くままに (松江市・雲南市) 14

「民話を返す」 (美郷町) 20

鱈っ子と行く韓竈神社 (出雲市) 26

「山陰」という負荷をかけて (松江市) 32

ここは未来の世界遺産 (雲南市) 36

コウノトリがやって来た! (雲南市) 42

編集後記 48

ひだまりのひと (裏表紙裏)

【講演】 島根県立大学人間文化学部地域文化学科 令和元年度 客員教授講演会より

先入観との闘い ―島根だからこそ解ること、学べること―

映画監督・脚本家 錦織良成

このたび「高津川」という映画を公開しました。島根を舞台にオリジナル脚本で撮影した7本目の映画です。昨年日本では、映画の興行収入が過去最高でした。実はこれは、先入観と思いつきのシステムが極まっていることと表われです。今日は、「先入観との闘い」と題し、映画監督としていろいろな角度からものとを見て、学んだことをお話しします。僕の出身地は平田です。今でも海はきれいですが、そこにあった浜は埋立地になりました。埋め立てて企業を誘致しようとしたのですが、企業は来ず、埋め立ての判断をした人はもういません。これが教えるのは、今僕たちがしている判断は本当に正しいのかということ。それを

考えるためのお話です。学んでほしいのは、知識ではなく考え方です。

最近、4Kや8Kが登場し

「画面がきれいになった」といわれます。しかし、8Kですら約150年前からあるフィルムには勝てません。最先端の技術を知っている人ほど、アナログに戻ります。「スター・ウォーズ」もフィルムで撮っていました。なぜ日本人はそのことを知らないのか。そこに、日本人の思い込みがあります。4K・8Kを推進している企業のある日本では、デジタルが良いとされる。新しく出たものは前のものよりもクオリティーが低いと思われる。これは、先入観です。つまり、日本では、「インフォメーション」＝儲けるための情報発信ばかりで、人が知っておくべき「本当の情報」は出てこないのです。フィルムで撮れば150年残ることは実証され、クオリティーはデジタルより高い。僕がフィルムで撮る理由です。既存の価値観を疑うこと、100年スパンで俯瞰して見ようとするのが大切です。

本当に自分が知るべきことは、自分で歩いて経験して知ることです。

それすらも本当かどうかはわからない。たとえば、ドキュメンタリー映画という表現があります。そこには、真実が映されているように思える。しかし、撮る角度というものはある。また、カメラの前で本当に本音を語るかという問題も。本音は別にあると示して終わる優秀なディレクターもいますが、ドキュメンタリー＝真実とは、単純すぎる思い込みです。

今の日本映画は、ほとんどが漫画などの原作をなぞって作られます。一方、「洋画」は海外の映画のほが、日本ではゲームのようなアメリカ映画しかかかりません。アメリカにもいろんな映画があるのに。マーケティングによって喜ばれそうな映画しかかかない。その本音は、「映画で儲けたい」です。そして、ままと上手くいっている。しかし、映画は本来、文学や芸術と通じていて、社会問題への警鐘をならす映画、まるで詩のような映画など、世界中にさまざまな映画があるので。日本では、映画＝娯楽としか捉えない。ここにも先入観があります。

島根は人口70万ぐらいですが、江戸時代もそのくらいでした。すごいことです。実は日本中に、出雲と関

わるものがたくさんあります。たとえば、有名な博多祇園山笠で山車に乗っているのは、みんな出雲の神さまです。島根は確かに人口減少していますが、「人口が増えたらいいところがある」も思い込み。アフリカが苦しむ理由を考えればわかります。「島根には何も無い」と思い東京に出た僕ですが、それは思い込みでした。周りの大人の思い込みでもありました。「島根は遅れている」も、今そう思っている大人の価値観にすぎません。高津川は、一級河川でダムのない、日本唯一の川です。それは、人口が少ないからやっていると。それを、遅れていると考えるのか。僕は最先端といえると思います。周りとは比べて、一番であるかどうかは関係ありません。その人がどう考えているかです。地域とはそういうもので、比べるものではなく、住んでいる人がどう考えているかが問題。思い込みや先入観でなく、本当に自分の足元を見たことがあるかが重要なのです。皆さんは大学で、豊かに生きるために自分を磨いているはず。自分の生きていく立ち位置を振り返ってほしいと思います。

(構成 山根繁樹)

特集「つなぐ」



木次線を残したい

～街はもちろん、人もつなぐ～

(雲南市・奥出雲町)

山口 香穂里

私が木次線の取り組みを取材しようと思ったきっかけは、南宍道で開催された祭のボランティアに参加した際に「ツナガルダンス」を踊ったことです。ツナガルダンスとは、木次線全線開通80周年を記念して作られたダンスです。南宍道駅や出雲大東駅をはじめ、木次線沿線の11駅で撮影されました。動画はYouTubeで視聴できます。ツナガルダンスは、実際に保育園やよさこいチームの方も踊られます。飛び入りで参加させて頂いたのにも関わらず、出演者だけでなく地域の方も温かく迎え入れて下さいました。

今回の取材ではイベントに参加し、トロッコ列車「奥出雲おろち号」に乗車しました。また、出雲大東駅の「つむぎ」さんにお話を伺いました。三江線が廃止になって2年。「次は木次線の番だ」と危惧する声もあります。三江線が廃止になった今、木次線をどう未来へ繋いでいくか。





そこでは、木次線を残すために取り組む多くの人に出会い、魅力をたくさん発見することが出来ました。

木次線沿線にはイベントがたくさん

木次線沿線では、さまざまなイベントが開催されています。今回私は、11月16日に出雲大東駅で開催された

■ (左上) みんなの駅フェスではスタンプラリーも行われていた。(右上) 地元のよさこいチームによる「ツナガルダンス」。(右下) 大東駅で撮影した写真。

「みんなの駅フェス」に行ってきた。みんなの駅フェスでは、地元団体のよさこいチームやダンスチーム、弾き語りの方などが出演され、とても盛り上がりました。私が見たかった「ツナガルダンス」も見ることが出来ました！ 皆さんとても楽しそう。つむぎの代表、南波由美子さんも一緒に踊られています。また、同時開催されていた「食のフェスタ in 2019」では、地元の団体が出店され、無料で豚汁も配布されました。ステージ発表はもちろん、食のフェスタが駅で開催されることは珍しいかもしれません。

駅フェスでお会いした鉄道部の方々

カメラを持った私たちに、列車の撮影場所とコツを教えてくださいました。福間美博さん。木次線活性化に携わっている中のお一人です。福間さんは、下久野駅で以前、イチゴやトウモロコシを乗客に無料で配布していたそうです。下久野駅には、イチゴとトウモロコシの絵が描かれた看板が今もあります。福間さんは駅フェスの目的を、「駅を拠点として活性化させる」ことだと言います。

松江ではイオン、出雲ではゆめタウンに人が集まります。そうではなく、出雲大東駅では駅中心に人が集まっ

てほしいと願っているそうです。

お話をしていると、列車がやってきました。間近で列車を撮影すると、迫力が違います！ カメラを縦にしたりズームしたりと試行錯誤しながら、写真を撮たくさん撮りました。

福間さんのご紹介で、浜田鉄道部部長の足立勉さんにもお話を伺うことができました。足立さんは、2018年の5月まで木次駅で勤務されていましたが、同年6月に浜田へ異動となりました。つむぎの代表、南波さんは「足立さんなくして今の木次線活性化はなかった」と言

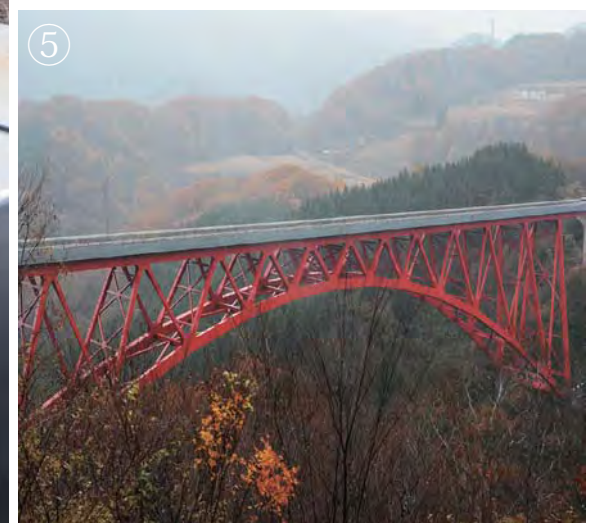


■ (左) 無料で配布された豚汁。(右上) 列車の利用者に米すきいどり券を配布する足立さん。(右下) 食フェスタに出店されていたステーキ

います。そんな足立さんは、木次線の取り組みが珍しいとおっしゃいました。駅ごとでイベントが開催されるなど、活性化が盛んな地域はあまり多くないとのこと。私は、岡山県の出身ですが、駅でのイベントや活性化事業を見聞きした記憶がありません。たしかに珍しいなと思います。取材をしていました。



いざ出発！
線路を走るおろち号



■①木次駅の看板 ②2キロ先の出口が見えるトンネル ③下久野駅に設置されている看板 ④走る列車を撮影した1枚 ⑤県境付近の赤い橋

トロッコ列車「奥出雲おろち号」

木次線の魅力を知るために、実際に木次線を利用することにしました。11月18日、トロッコ列車「奥出雲おろち号」に乗車。おろち号は、4月から11月までの金、土、日、祝日（GWと夏休み、紅葉シーズンは毎日）に運行しています。乗客数は64名で全席指定。2両編成で走行しており、1号車がトロッコ、2号車が控車（雨や寒い時でも安心）です。当日は曇り空で雨も降りました。出発駅の木次駅。駅の看板には、他とは違う工夫が…。実は「きすき」の「すき」を♡で表記しており、とても可愛いデザインになっていきます。七夕やバレンタインデーの季節になると、限定デザインになります。トロッコ列車は、木の椅子でガラス窓がないことが特徴。車窓からは色づいた葉っぱが見られ、自然の絶景を楽しむことができました。また、窓がない分トロッコの揺れもいっそう感じられました。思ったよりもガタゴトと揺れ、アトラクションのようだったと言う高瀬さん。揺れだけでなく、線路やトンネルを走る音も大きく聞こえました。冷たい雨風を

浴びながら、列車は山間部へ走りまゐります。下久野駅では、先日福間さんから聞きした看板を発見。トウモロコシとイチゴの絵が描かれています。下久野駅を過ぎると、全長2キロもの真つすぐに伸びるトンネルが見えます。入り口と出口の標高差は55メートルもあるそうです。入り口からは出口の光が小さく見え、進んで行くにつれてどんどん大きくなる光を眺めました。列車は、亀嵩駅へ。駅舎内にある蕎麦屋「扇屋」で予約していた、亀嵩そばが届きました！ホームと線路が近く、列車に乗ったまま受け取りました。途中で下車した出雲坂根駅。出雲坂根駅といえば、延命水。島根県名水百選にも選ばれている水です。また、焼き鳥も販売されており、タレがとても美味しかったです。列車はさらに山奥へ走行します。全国的に珍しい「三段式スイッチバック」は、おろち号の最大の見物です。進行方向の右側には、線路が見え、先ほど見上げた道をバックして登ります。また、木の隙間からは赤色が特徴の三井野原橋が見えます。赤い橋を撮ろうと、乗客の皆さんも身を乗り出して撮影されていました。こ



こを抜けると広島県です。県境は標高が高く、この日一番の寒さ。乗車から2時間30分後、終点の備後落合駅に到着です！ 終始、学生も先生も口を揃えて「寒い！」（笑）ですが、列車に乗ってみないとわからない風景をたくさん見ることができました。生まれてからずっと島根に住んでいる河野さんも、「こんなところがあったんだ」と感慨深げでした。この日は、なんと台湾からの観光客



の方も乗車されていました。「撮り鉄」の人の中には、大阪府や愛媛県から来た方もいらっしやったようです。石丸さんは、「みんなから愛されてるんだなと思った」と言っています。私は、素敵な写真を撮ることが出来て大満足です。最後はみんな記念写真！ 駅弁も食べることが出来て良い思い出です。そして何より、寒い中列車を追いかけて写真撮影してくださった山根先生に感謝！

木次線沿線の活性化

「みんなの駅フェス」を主催したのは、つむぎさんです。その代表である雲南市大東駅指定管理者の南波由美子さん（愛称 駅長）にお話を伺いました。出雲大東駅では、木次線の利用者を増やすために様々な取り組みを行っています。南波さんは大東で生まれ育ち、学生時代を神戸で過ごしました。当時は地元愛が少なく、島根に戻らないだろうと思っていたそうです。しかし、阪神淡路大震災で被災したことを受け、地元に関心を持ちたいと思い帰郷されました。人と変わったことがしたい、リーダーになりたいと思っていた南波さ

駅が拠点

んは、つむぎの代表になりました。つむぎは、以前南波さんが勤めていた管理組合がもとになっていました。その組合が解散するときに、何かやりたいと集まっていた人と、既にできていたマスコットキャラクターを生かすため、平成28年に設立されました。切符販売だけでなく、特産品の販売、イベントの企画・運営なども行っています。

一人では出来ないことでも皆とならできるという経験はありませんか？ つむぎには、そのような人がたくさん集まっています。雲南せいでいねんだんは、その一つ。「光舞う町」という曲をプロデュースするなど、バンド活動も行っています。実



■つむぎのロゴマーク。モチーフは、ひらがなの「つ」。ひと・ばしょ・ものをつなぎたいという思いから「つむぎ」。



■愛称「駅長」の南波さん

際に市内の小学校で歌われるそうです。メンバーの中には出雲の方もいらっしゃるそう。南波さんは、拠点駅ならば大東にはこだわりたくないとおっしゃいます。南波さん自身も、イベントに呼ばれて出演することが多く、昨年の12月に松江駅で開催されたクリスマスイベントに出演されました。裏方の仕事だけでなく、出演されることもあるとお聞きし驚きました。なんと、つむぎ設立の1年目には、2人でイベントを8回も開催したそうです。それを支えたのは、やりたいことがあつて集まった方々。南波さんをはじめ、地域を盛り上げるために立ちあがった人達がいるからこそ、今のつむぎがあるのだと思います。

出雲大東駅では、駅舎の空きスペースを利用して文化教室も開催しています。取材したこの日も、パソコン教室が開かれていました。毎週火曜日と第二・第四土曜日に開催されます。その他にも、ウクレレ教室や、はり治療などを行っているそうです。南波さんは、駅のスペースをどんどん使ってほしいとおっしゃっていました。そのため、ケーブル局でも宣伝をしているとのこと。ただし、対象は、趣旨を理解している人に限るそうなので、業務に対する南波さんの思いを感じますね。

商品開発もされています！

雲南市の課題は、観光のリピーターが少ないことだそうです。そこで考案したのが「うんなん 学べるスイーツ」。モチーフとなったものは、なんとたたらの炉です！カレーの案もあつたそうですが、女子ウケを狙ってスイーツになったそうです。南波さんは、「炉のことを知らない私でも興味を持てる」と笑いながらおっしゃっていました。中は層になっており、いろんな味も楽しめます。なんと、スプーンがスコップの形をしています！再現度が高く驚きました。松江市や雲南

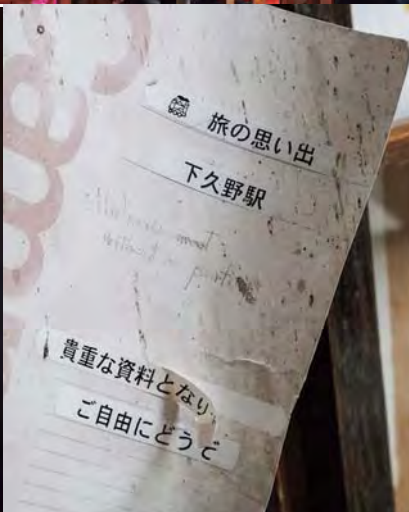
市に試食は出すそうですが、本物は太東に行かなければ食べられません。一人でも来てくれるきっかけを作るためです。私も試食しましたが、とてもおいしかったです。あえて、味は言いません。食べたい方は、大東駅を訪れてください。商品開発はスイーツだけではありません。「木々ほるだ〜」というキーホルダーも開発されています。木々ほるだ〜は、き心のデザインがモチーフです。き心はデザインにしやすい、語呂もよいため「もつと注目してほしい！」とおっしゃっていました。南波さんによると、このき心に注目しているのは大東駅だけ



■(左上)「ご縁か〜ど」(左中) マスコットキャラクターのほたる駅長 (左下)「木々ほるだ〜」(右上) 学べるスイーツのたたらの炉 (右下) 洋風最中「かもなか」

しいです…。この木々ほるだ〜を頂きました。もつと注目度が増えることを願っています!!

事務所には、イラストが描かれたカードがたくさん貼られています。これは「ご縁か〜ど」です。絵を描くことが好きな人に依頼し、イラストを描いてもらったそうです。手で切っているため、大きさもまちまち。手作り感のある素敵なカードです。写真は南波さんです。カードになっているのは、人だけではありません。くしなだひめやホタル姫などのキャラクターもカードになっています。他にも、手作りのほたる駅長のマスコットもありました。



帰り際に南波さんが、加茂の地名（木次線沿線）にまつわる最中を紹介してくださいました。それが、「かもなか」。「加茂」と「かも」をかけた考案されたものです。普通の最中とは違い、カステラ生地と一緒に焼き上げ、中には抹茶チョコやあんバターが入っています。かもなかは、加茂町加茂中のパティスリー Hanahana さんで販売されています。ぜひ訪れてみてください。

「初めの一步」となる駅に

南波さんは「活動が見える化したとき」つながりを感じるとおっしゃいます。ご縁か〜どや学べるスウィーツが形になった時がそう。助けてくれる人がいるからできるのだとおっしゃっていました。また、私たちの取材のように、話を聞いてくれるときに活動の成果を実感するそ

うです。私たちが南波さんに取材を行い、雑誌を通して別の人にも発信されることに、さらにつながりを感じると答えてくださいました。出雲大東駅で開催されるイベントには、地元の高校生によるバンドチームやダンスグループも出演します。イベントを通して「初めの一步」を踏み出してほしい、そのような場所を提供したいとおっしゃいます。駅にはアルバイトの出来ない学生の

ために募金箱を設置し、夢を応援されています。

イベント時以外は利用者は少なく、駅も閑散としています。たとえ何十年後に列車がなくなつたとしても、人が集まれる道の駅のような場所にしたとのこと。駅フェスのときは多くの人で賑わっていました。しかし、取材日は南波さんも笑つてしまうくらいに利用者が少なかったです。私も、人が集まる場所になることを願っています。

人の温かさが魅力の街

今回の取材で、地域の魅力をたくさん見つけることができました。一番は人だと思えます。トロッコの指定座席が離れていた私たちに席を提供してくださいました乗務員の方。たまたま居合わせてお話をしてくださいました福間さんと足立さん。取材を快諾してください、限定品まで譲ってくださいました南波さん。人との繋がりをたくさん感じました。木次線沿線にあるのは自然やきれいな風景だけではなくありません。この記事が、木次線の取り組みや魅力を知っていただけるきっかけになると嬉しいです。

(やまぐちかおり)



都市につながる 山王寺の棚田

(雲南市山王寺地区)

河野夏海



■レーキを持ち作業をする様子。

11月11日、私は島根県雲南市山王寺地区で活動する多久和厚さんを取材させていただきました。荒廃した田んぼの再生作業。電気、ガスに頼らない自給自足の生活。釜で炊いたご飯。様々な、初体験をすることができました。

多久和厚さん

松江市出身の多久和厚さんは東京で働いていました。東京では、自分を知る人は仕事場の人だけ。家と会社を行き来する毎日だったそうです。40歳のとき、会社の都合でUターンしてきました。その後、独立し松江でIT企業の社長を務め多忙な日々を送ったそうです。昔から自給自足の生活を夢見ていた多久和厚さんは59歳で退職し、2012年から奥様と山王寺で里山ハウスを始めました。山王寺ではたくさんの自然や生き物と共生することができ、人間らしさを感じる事ができる。また、人々がフレンドリーで外から来た人を受け入れてくれるそうです。現在5世帯が山王寺にUターンしていて、みんな草刈りをするなど日々助け合いながら生活をしています。里山ハウ



■ 多久和さんから作業の説明を聞く様子。

スでは、春から秋にかけて田植え、稲刈り、マコモタケ収穫、味噌・豆腐作りなどを体験することができま
す。その他にも、空き家を改修し「冒
険の森てんば」を2016年に開設
しました。冒険の森てんばには遊具
やたくさんの絵本があり、子供たち
が集まる憩いの場になっています。

みんなで作る蓮の池 プロジェクト

到着するとまずその絶景に目を奪
われました。なんととっても山王寺
は美しい棚田が有名です。平成11年
に「日本の棚田百選」に認定されま
した。恥ずかしながら私は、松江か
ら30分の距離にこんなに美しい絶景
があることを知りませんでした。取
材日は天気も良く、空気もとてもお
いしかったです。「マイナスイオン
だ!」としばらく棚田を眺めながら
深呼吸をしていました。

そのあと、多久和さんと合流する
とすぐにレーキという除草などに用
いる農具を手渡されました。すると
「今日は、荒廃した田んぼを蓮の池
にする作業を行います。」と言われ
ました。名付けて「みんなで作る蓮
の池プロジェクト」です。多久和さ
んによると、近年日本には荒廃した
田んぼが九州の大ききさぐらいあり、
山王寺にも耕作放棄された田んぼが
多数あります。田んぼは小さなダム
の役割を果たし、大雨が降っても水
を食い止めてくれる。しかし、荒廃
すれば食い止めることはできず農薬

が入った水が上流から下流に流れて
しまう。そうすれば、流れてきた農
薬の影響で魚が取れなくなるなど下
流域に悪影響を及ぼすそうです。上
流の環境が下流つまり都市に影響す
る。多久和さんは山王寺の棚田に手
を加え、それを情報発信し、いろい
ろの人に参加してもらおうことで国土や
環境の保全につなげています。また、
山王寺の美しい景観を守り続けるた
めにも荒廃した田んぼの再生は必要
です。そんな話を聞いて、景観を守
ることはもちろん、私たちが豊かに
暮らすことにつながる体験ができる
のかとワクワクしました。

耕作放棄された田んぼには雑草が
生い茂っています。雑草を多久和さ
んがあらかじめ刈ってくださいと私
たちはそれを集める作業をしまし
た。作業を行ってみると、集めても
集めても雑草がなかなか減らなく
て、一生終わらないのではないかと
思いました。また、全身の普段使わな
い筋肉を動かしたので後半は思うよ
うに体が動かなくなりました(次の日
すっかり筋肉痛になりました)。み
んなで協力しあって一時間半ぐらい
で一つの田んぼの雑草を集めること
ができました。そのあと、集めた雑



■ 冒険の森てんば



■ 作業を始めよう。



■ (左上) 集めた雑草の焚火の前で。(右上2枚) 古代米の田んぼとたんぼの学校。(中3枚) ひたすら作業を行う様子。(左下) 冒険の森てんばの裏にある蓮の池。(右下) 田んぼから雑草がなくなった!

草の一部に火をつけて燃やし、とても達成感を覚えます。それと同時に「普段私たちが豊かに暮らせているのは、農家の方々のおかげだな」と身をもって感じる事ができました。

作業が終わったら、奥様の多久和ゆくえさんが釜で炊いたご飯をご用意してくださいました。ご飯は多久和さんが作られた棚田米という銘柄の新米でした。お米は、真っ白くつやつやで甘い味が口いっぱい広がりました。作業の後ということもあり格別でした。また、一緒に用意してくださいましたお味噌汁とお漬物もとてもおいしくご飯を三杯も食べました。中には四杯も食べた人もいました。

マコモって何？

多久和さんはマコモの六次産業化に力を入れています。そもそも皆さんはマコモを知っていますか？ マコモはイネ科の大型多年草です。東アジア原産で稲よりも古い時代から日本列島の水辺で生育していました。奈良時代に編まれた「出雲国風土記」に



■ (左上) デザートのさつまいも。(上中) 窯で炊いた棚田米とお味噌汁。(右上) 炊き立ての棚田米。
 (左下) ご飯を盛る鹿野先生。(右下) ご飯の準備。

も登場するマコモは、古くから宍道湖や斐伊川に近い湿原に生えています。当時からマコモは産物として知られていたようです。また、出雲大社の「涼殿祭」という神事では、すずみどのまつり現在に至るまでマコモが使われてきました。また、出雲大社の本殿のしめ縄にもマコモが使われています。マコモは稲と同じように水を張ったところで育てられます。近頃は稲の周りにマコモを植えている田んぼも多くなってきました。秋も深まるとマコモの背丈は人よりも伸びていきます。マコモはマコモタケとして食材になるのです。マコモタケとはマコモの茎の根元がタケノコのように肥大化したもの。タケノコとシイタケとアスパラガスを同時に食べるような食感です。葉は天日乾燥させて輪切りにして焙煎すると、マコモ茶になります。マコモに多く含まれる珪酸けいさんにはデトックス効果があるのです。

多久和さんはマコモの栽培方法を京都の有機農業の先生

■みんなでご飯をいただきます。



から教わり、現在無農薬でマコモを栽培して4年目だそうです。なんと北海道から沖縄まで株分けをしています。品種は「一点紅」。マコモの葉は地域のお茶屋さんでマコモ茶やマコモパウダーに加工してもらって販売しています。根元から葉っぱまでマコモには無駄なところがないのもありません。私たちが手伝わせていただいた蓮もマコモのように加工してお茶にすることができそう



■ (右上) 六次産業の商品。(右下) ゆくえさんの話を聞く筆者。
(左) 150cmの高瀬さんとマコモ。

です。将来的には、蓮も商品にして販売する予定だそう。ほかに、オオバコ、ドクダミ、ヨモギ、スギナなどの薬草に着目して、生産、加工、販売を地域で行う六次産業化を目指しています。そうすることで、荒廃した田んぼの再生もでき、地域活性化にもつながることができそうです。

自給自足の生活

多久和さんは春から秋にかけて里山ハウスで自給自足の生活をされています。

その自給自足は徹底していて、電力は風力発電と太陽光発電。風呂を沸かすのは竹林から採ってきた竹を使った竹ボイラー。竹はバイオトイレとしても活用しています。冷房もテレビもありません。そんな、自給自足の一番の魅力をお聞きすると、「災害に強い」とのこと。確かに、電気、ガスが止まっても大丈夫。多少の不自由さがあるけど「文化発展しすぎてはたして幸せなのか？」と投げかけられました。確かに、現代の人は機械がないと生活できなくなってきたと感じます。今回、多久和さんを取材させていただいたことで身近な自然の中で暮らす人の魅力を知ることができました。

(ここのなつみ)

風の吹くままに

こくふ
ギャラリー木空風&カフェ・ドリ／秋葉窯



(松江市・雲南市)

石丸夕姫



「ひだまりのおと」、記念すべき第一号の特集テーマは「つなぐ」。地元を離れ、松江で暮らし始めて早一年半。知り合いゼロの慣れない土地だったからこそ、人との出会いや「つながり」を嬉しく感じられるようになりました。今回訪れたのは、忌部にある「木空風」さん。木空風には「人とのつながり」なしでは語れない、あたたかなストーリーがありました。また、どこか引き寄せられる、オーナーの飯島三枝子さんという人物にすっかり魅了されてしまうことになるのです。

あたたかい空間

11月14日、木空風のランチを食べ、8人の大所帯で向かいました。かわいらしい案内板に導かれながら山道を抜けると、お目当ての茅葺屋根が見えてきます。20年前、自分で再生させたという築約180年の古民家は、木々や草花に囲まれています。まるでおとぎ話の世界へ来たかのようなです。

お店の中には、飯島さん手作りの陶器などいろいろな作品を置いたギャラリースペースが。カフェスペースでは、野菜をたっぷり使ったランチや、優しい味の自家製ケーキを楽しむことができます。料理を囲んでお話を楽しむお客さんもおいれ、窓の外の自然を見ながらゆっくり味わうお客さんもいました。なんだか懐かしい空間に、つい時間を忘れて佇んでしまいます…。

このような素敵な空間をつくりだすきっかけは何だったのでしょうか。

陶芸に憧れて

ランチを食べ終わった後、囲炉裏で温まりながら、木空風のオーナー

飯島さんにお話をお聞きしました。

飯島三枝子さんは、宮崎生まれの宮崎育ち。7歳くらいまで、小高い丘の上で野生児のごとく成長したそうです。木空風へ続く山道は、故郷の景色にどことなく似ていたといいます。島根には20代の時、結婚を機にやってきました。昔から陶器が好きで、「陶芸をやりたいかった」という飯島さん。友達のいない環境にきたなかで、外に出ることを心がけていました。そこで親しくなった知り合いから、島根には窯元が多いことを聞きます。実際に窯元へ行き、弟子入りを頼んだこともあったそうです。しかし、子供を抱えているうちは無理だと言われます。当時は保育園も少なく、飯島さん自身も、子供の小さい時を他の人にゆだねるのはもったいないと思っていました。

ようやく子育てもひと段落し、「やっぱり陶芸がやりたい!」と本格的に教わりに行った飯島さん。自分で窯を買って焼くようにもなり、作品が溜まるとみんなにあげたり展示会をしたりしました。そのうち自宅に小屋を建ててもらい、自宅ショップを始めることに。そうしているうちに家が手狭になり、ギャラ

リーとなる廃屋を紹介されることになるのです。



■手作りの陶器の上に盛り付けられた料理の数々。直売市で手に入れる地域の食材を使っています。ナスの時はナスばかり、大根の時は大根ばかり…の、ばっかり料理になることも多々あるそうです(笑)



■ (前) 飯島さん。(奥) 娘の杏子さん。



廃屋

紹介された廃屋を見に行くこと、「ほんとにぼろかった」と飯島さんですが、もう一度ひとりで見に行き、買うことを決断しました。当時はまだ古民家再生というのもほとんどなく、みんなびつくりです。やめるよう促す声も上がりました。なぜ買うことを決めたのですか？と聞くと、「かわいいと思ったの」——答えしてくれた飯島さんに思わず微笑ん

でしまいました。「人が捨てるようなもの、古いものが好き」だと後々気づいたのだそう。そんな飯島さんを見て周りの方達は、えらいものを背負い込んだと思いい、助けてくれたのでした。

廃屋を買って二年半の間、朝から晩まで、みんなどこかで何か作業している、そんな状態が続きました。友達が友達を呼び、そのまた友達を「役に立てるのではないか」と連れてくるのです。そうして人が少しずつ集まってくると、今度はものが集



ナツハゼ



■（右）ナツハゼのジャムを味見させていただきました！ブルーベリーを少し酸っぱくしたような感じでおいしい。

まってきました。「好きそうなのがあるよ」と声をかけてくれたのは、木空風から下りたところにある「原田工務店」さんでした。原田工務店をはじめとするたくさんの方たちが、ガラスや木材などを持ってきてくださったのです。それも、台所を作っている時にシンクは必要かと言われるたり：。「ここがほしいよね」という時にタイミングよく電話がかかってくるので、面白いものでした。飯島さんは、遠慮しつつもいろいろな方の親切をありがたく受け取りまし

た。一時は「もらいもの」で資材置き場のような状態になっていたそう。飯島さんには、人を引き付ける何かがありそうです。

それぞれが持っている技術を生かし、なるべくお金をかけずに自分たちで、ゆつくり楽しく作業を進めていきます。できない所はプロにおまかせ。すると、大工さんが作業しているところを見たり、聞いたりしてノウハウを覚え、みんなの技術も上がっていきました。

茅葺名人との出会い

「茅を何とかしないといけない」、それは飯島さんたちにとって大きな

■夢は「ぼくち街道」。草刈は気持ちがよく、自分でやることで発見もあるのだそう。みんなが雑草と思っても、飯島さんにとってはきれいなものなのです。



課題でした。ふと隣の家へ行き聞いてみると、一体どんな巡りあわせか、なんとその方は茅葺の棟梁だったのです（忌部は昔、茅葺屋根の家が多かったそう）。名人は、まさに知恵の塊で、たくさんのお話をしてくださいました。当時70代の名人も現在は90代。飯島さんは、そんな宝のような話を「なんとか残しておきたい」——お元氣なうちにもう一度会いに行つてまあとめたい、といっています。

名人福島昭さんは、飯島さんがあらためて茅の葺き替えをお願いすると、「ここ」で最後だと思つ」と、手を貸してくださいませ。そうして、三年目、名人の友人や下手間5



■茅葺屋根。



■囲炉裏の火で、
コーヒー豆を
煎っていました。



■きれいな桜の木がなぜか
枯れてしまったそう。
桜の枝、最後のおつとめ。

く6人も集まり、みんな協力しながら茅葺をしました。一日の作業が終わると茅で全身は真っ黒。そのため車にシートを敷いて帰っていたそう。そんな日々が続き、10日で全面葺き替えをしたのでした。

台所前にある囲炉裏は、屋根のために必要不可欠なもの。廃屋を買った当初、囲炉裏がなくなっていたため、友達が作ってくれたのです。実は移動式で動かすことができるのですが、中で組み立ててしまったため、外には出せないといえます(笑)。

ちよつと疲れたら月一で展示会をして、みんな気分転換をしました。染め物をする人、絵を描く人などさまざまです。その時々でうどんなを作ったり、ピザを焼いたりします。そうすることで、散らかっていてもそこだけ片付くのだそう。「散らかる↓片付ける」を繰り返して、気合を入れ直しながら、作業を進めていきました。木空風のぬくもりある空間にいと、不思議とそのあたかな日々が感じられてくるようです。

こうして「木空風」は、飯島さんと多くの人のつながりを経て、再生することができたのです。「たくさん人の手を借りてきて、返すのも大変」と、笑顔で飯島さん。「だけど、また木空風へ訪れた時にはコーヒーの一杯でももてなすことができたらし」とおっしゃいます。

原点

廃屋を再生するにあたり、飯島さん曰く「計画性はなかった」とのこと。みんなが持ち込んでくれた道具や資材ありきで自由に作業をしました。ただ、周りの方達からは飯島さんが先導するよう言われます。ああしたい、こうしたいと指示がで

きたのは、飯島さんに原点があったからでした。

小さい頃過ごした小さな丘の上では、お父さんが作ったブランコや砂場で遊んでいました。ブランコに乗ると、大きな川が見えて、宮崎市を一望できたそうです。花やいちごに野菜を育て、にわとりが歩き回っている光景。それを話すと、娘さんか

ら「赤毛のアンの世界みたいね」と言われたそう。学習机や引き出しも、大工さんではありませんが、お父さんが作ってくれたものでした。水道会社で働くお父さんは、池や小さな滝など「なんでも見よう見まねで作る人」でした。タイルを貼るのを見ていたり、時には手伝ったりしていたため、廃屋で作業するときも、体は覚えていたのです。また、花が好きで夜遅くまで庭にいたお母さんのために、料理をすることも。お母さんがご飯を作っている時は、そこへくっついて手伝いました。小学校の頃からコロッケやカレーを作っていたのだそうです。

飯島さんのものづくりへの思いの原点は、この暮らしにありました。廃屋の再生は、飯島さんが道標となつて、みんなでその道を作つて

いったのだと思えました。

楓の木

「木空風」とはどんな意味なんでしょう。名前の由来をお聞きしました。

廃屋で作業していた頃、楓の木があったそう。ふと楓の木の前にあるベンチに座り、空を見上げると、月がきれいな夜でした。そこで、楓の間に月を入れて「木月風」はどうかということに。それからまた練り直し「木空風」となったのです。

カフェの名前は「カフェ・ドリ」。当時飼っていた犬の名前からつけられました。が、この犬の本当の名前はドリではなく、エディなのだそう(笑)。どういふことか聞くと、エディは10個ほど名前を持っており、自由に呼ばれていたのです。その中からドリが選ばれたのでした。

■月の形に切り抜かれた窓。

建物内には至る所に色々な形をした様々な大きさの窓がありました!



■開かずの蔵を改装したというお部屋。意を決して開けると、気持ちの良い風がすーっと吹いてきたのだそう。蔵は空調が大事とのこと。「カフェしょっかな」と言った娘さんが、壁をピンク色に塗ったときはみんなびっくりしたそうです。かわいらしい!



■飯島さん、子育て中は、自宅のできる紙粘土の人形作りにはまっていました。人に教えたりもしていたんだそうです。



月一で行われている陶芸教室にお邪魔させていただきました。
 窯の名前は「秋葉窯」といい、木次駅付近の山の上、洞光寺の境内にあります。秋葉窯は、10年ほど前、持ち主の方から譲られたもの。最初は断ろうとしたものの、「なるようになるか」と、いただいたそうです。40年ほど前に作られ、長く使われていましたが、高齢化により下火に。みんなが楽しんだ窯というのがわかったという飯島さんは、「繋げないと」考えます。そこで、多少風を入れる目的で「月一陶芸教室」をすることに。窯焚きや薬漬けをするために月2・3回は来ているそうです。

飯島さんは、飽きっぽい自分が続けられたのが「陶芸」だといいます。粘土が好きで、こねていると自分に戻れるのだそう。どんなものを作るのですか？と聞きました。——こういう器があるといいなと思うもの、使いやすく楽しくなるようなもの、自分が作って楽しくないものは作らない、と教えてくださいました。これからもずっと陶芸を続けたいといいます。私も、またいつか自分が楽しくなるような器を作り秋葉窯を訪れたいと思いました。



■完成した器です。(左)柳楽作。(右)石丸作。二人とも大満足。

■教室を始める前にみなでおしゃべり。自分たちが作った器の活用方法について話していました！



■途中、お茶をして休憩。心も体も温まりました。



■体験をする前にまず、囲炉裏で温まりました。
この日は田淵さんも参加してくれました！



■発酵させたピザ生地を丸く伸ばして、ソースと具をのせていきます。個性が出ますね！



■友人が作ってくれたという四代目のピザ釜。パワーアップしていつてるそうです！



ピザ釜体験

■ナツハゼのジャムを混ぜたクッキー。釜で焼きました。



■出来上がったピザとスープをいただきます。この他に、窯で焼いた野菜も。とても甘くておいしかったです！

飯島さん

■「豊か」、「桃源郷」と



最後に、これからやりたいことは何かお聞きしました。「衣食住」を大切に暮らすこと、そして「お茶」がしたいとのこと。木空風の離れには、廃屋の修復をしながら0からのスタートで作った茶室が。畳や屋根の瓦など「もらいもの」で完成させました。今までも習ってきたそうですが、これから向き合っていきたいと話してくださいました。

飯島さん親子や木空風の空間を通して、人の温かさやものづくりの楽しさを感じることができました。古くても、人が捨ててしまうようなものだとしても、「自分が好きだと思うもの」を大切にしている飯島さん。そんな心の温かい飯島さんだからこそ、たくさんの人が集まってくるのだと、わかったような気がします。(いしまるゆき)



「民話を返す」

美郷町で行われた

「民話を聞くつどい」

(島根県立大学松江キャンパスの取り組み)

山根繁樹



「民話を返す」？ 2019年11月16日、島根県邑智郡美郷町の
大和小学校において、「民話を聞くつどい」が行われました。会の
冒頭、島根県立大学人間文化学部の岩田英作教授は、「旧大和村で
お預かりした民話を返しに来ました」と挨拶しました。この会
は一体何が行われたのか。そこには、長い年月を隔てて、伝承を
残していこうとする人びとの姿がありました。島根県立大学松江
キャンパスの活動のご紹介もかねて、レポートします。

「民話を返す」の意味

「民話を聞くつどい」では、11の民話が語られました。それらは、いずれも旧大和村で採集されたものです。採集されたのは、1974年7月26日から29日の4日間。採集したのは、当時島根女子短期大学保育学科に所属した5名の学生と、島根大学教育学部に所属した6名の学生でした。学生たちは、島根大学教育学部の教授だった田中肇一先生（現名誉教授）のご指導のもと、夏休みを利用して民話採集に訪れたのです。

これらの民話は、音源テープから書き起こして冊子にされました。ただし、島根大学教育学部国語研究室昔話研究会編『島根県邑智郡大和村昔話集稿 巻二——都賀・都賀行地区——』（1975年5月）は比較的多くの部数が各地域図書館に残っていますが、島根女子短期大学昔話研究会編『巻一——比敷・宮内・村之郷地区——』は、限定版130部の発行で、現在の美郷町立図書館にも残存していなかったそうです。

当時の、手書きで翻字・編纂した同書と、音源テープの存在に気



資料をどうぞ



地元の方がたくさん来場



岩田英作教授（左）と山下由紀恵教授



会場は大和小学校

づいた島根県立大学人間文化学部の山下由紀恵教授は、岩田先生とともに「民話蘇生研究会」を立ち上げました。そこで、同書をデジタルファイル版とした複製版冊子を制作し、同時に音源テープからCDに保存したデジタル資料とともに、美郷町に寄贈されることになったのです。そして、寄贈を式典として行うのではなく、地元の方に民話を聞いてもらう「つどい」として行うこととし、美郷町教育委員会の協力を得て、当日を迎えたのでした。岩田先生の挨拶は、まさに地元の方々に「民話を返」そうという、民話蘇生研究会の意気込みを伝えるものでした。

45年前に採集した人たち

山下先生はその挨拶で、「採集された民話は、それまで語り継がれてきていたものです。だから、それを文字で残すだけでは意味がない。語って、聞いて伝えるものにしてほしい」と話しました。続いて講話に



坂本和子さん

入ります。最初は、「大和村の民話採集について」と題して田中先生。民話と昔話の違いから話し始めます。昔話とは、「むかしむかしあるところ」と始まり、旧大和村であれば、「それ、こつぷり」とか「それ、こつぽし」といった文句で終わることの多い、実際にはあり得ない話。「舌切り雀」といった類いの話です。昔の話としては伝説もあります、伝説はいつの時代のどこの話かはっ



きりして、名前を出す。ゆかりとされる地に証拠が残っていることも多い。他には、自身が体験したこととして語る話もあります。伝説と体験談は、地域独特のものとなる。そして、これら三つを総称して民話というのだ、とのこと。田中先生のお話には、採集時に会った具体的な店名や人名も登場し、聴衆のうちご年配の方々の中には、隣の人とうなずき合う姿も見られました。

続いている講話は女子短大卒業生の坂本和子さん。坂本さんは、民話採集の仲間5人で卒業論文を書いた思い出を語りました。また、採集した夏は暑く、訪問先の方たちから「カルピス攻め」にあったり、キュウリをもらったたりしたそうです。「大接待を受けた」とおっしゃっていました。島根大学卒業生の大野幸夫さんも採集時の思い出を語られました。公民館で大野さんが採話をした相手は、故黒川吾惣次さんでした。黒川さんは、その日「うりひめ」をはじめ14話を話されたそうです。大野さんは、予定を変更して最終日に黒川さんのお宅にうかがい、さらに10話を聞きました。卒業研究でも黒川さんの語る民話を扱うことにした大野さんによると、黒川さんは、94話形、102話を語れる、島根で一番の語り手だったそうです。黒川さんの語りはいつも「そのむかし、こつぷり」で終わったという事です。

甦る語り

「民話を聞くつどい」のメインイベントは、冊子にまとめられた民話を、集まった皆さんに語り聞かせることです。語り手としては、地元のボランティアの方4名、大和中学校の生徒さん4名。そして、45年前語り手であった上田元市さんのお孫さん上田賢逸さん、前述の黒川吾惣次さんの姪御さん竹内幸子さんも加わって、合計10名となりました。また、CDになった音源から、黒川吾惣次さんの語り「猿地藏」も聞きます。

最初の語り手となった上田さんは、「自分は祖父から話を聞いたことがない」と言いながら、「舌切り雀」を丁寧に語られました。次に登場された竹内さんも、「にせ本尊」を上手に語られます。続くボランティアの中には、地元の住職さん、保育園の園長さんもうらっしゃり、皆さん情感たっぷりに地元の方言で語っていかれました。友だちの曾おじいさんから昔話を聞いたという経験を話す方もいらっしゃ



大野幸夫さん

いました。大和中学校の生徒さんたちも、自ら志願して語りに挑戦した方ばかりだそうです。皆さん若干緊張しながらも、しっかりと語ってくれました。

前のスクリーンには、島根県立大保育教育学科の学生さんたちが昔話にあわせて作った絵や、地元の方にやる切り絵もスライドで映されました。小さなお子さんはスクリーンに見入りながら、熱心に聞き入っていました。

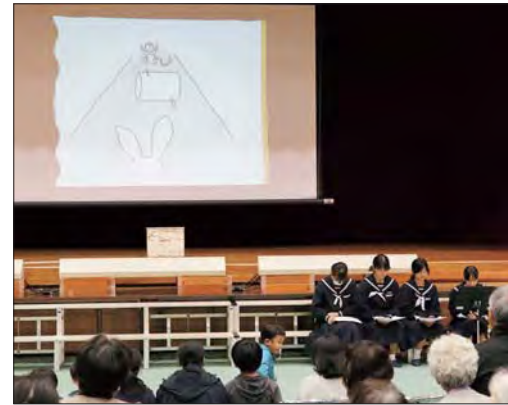
ました。ご年配の方には、目を閉じて懐かしそうにうなづく方もいらっしやいます。そして、語りが一つ終わるごとに、大きくあたたかな拍手が沸きあがりました。

C Dで甦った黒川さんの「猿地蔵」。バックには、採集時の蝉の声や、当時赤ん坊だったお孫さんの声も聞こえます。45年前の景色が目には浮かぶ方もいらっしやったのではないのでしょうか。

受け継がれる民話

会の終わりには、民話蘇生研究会から美郷町教育長（町立図書館長）へ、完全復刻冊子と音源C Dが贈呈されました。嘉戸隆美郷町長から御礼の挨拶があり、町長が「それでは、こっぷり」と挨拶を締められると、会場全体が大きな笑いと拍手に包まれました。

笑顔で会場を後にされる皆さんを送った後、語りのボランティアと中学生が集められ、「今日で終わりにせず、このメンバーで語っていきましよう」との声がかけられています。45年前に採集された民話が、今後も美郷町で語り継がれていくこと



■（上段左から）竹内幸子さんが「にせ本尊」を語る / 「舌切り雀」を語る上田賢逸さん / 自前の扮装で「かちかち山」を語る
 （中段左から）椅子席が満席で急遽ゴザを敷いて / 大和中学校の生徒さんたち / 「和尚と小僧」を語る本物のご住職
 （下段左から）挨拶する嘉戸隆 美郷町長 / 冊子とC Dになった音源の贈呈 / スクリーンに絵のスライド

を願って帰路につきました。
それ、こっぷり。

(やまねしげき 総合文化学科教員)



■ 美郷町スタッフの皆さん



神社に向かう石丸さん

わに
鱈かにっ子かんと行くか韓ま竈さん神社

(出雲市鱈淵地区)

高瀬美咲



①



②



③



④



⑤

①御花（寄付）の読み上げ

②天井の梁に乗った大蛇

③小学生たちが舞う神楽

④息ぴったりの演技

⑤巧妙な扇裁きにみんなが注目

11月2日、唐川町で唐川神楽が行われました。19時スタートです。雲州平田駅から車を走らせること20分、韓竈神社（通称「かんかまさん」）の拝殿近くに建てられた唐川館にたどり着きました。周りが茶畑と山に囲まれているせいか、唐川館の明かりが一際輝いて見えました。中にはもうお客さんが入っていて、ほとん

【唐川神楽を 次世代に伝える】

11月2日に唐川神楽、11月3日に韓竈神社の例大祭、11月12日に韓竈神社めぐりに行きました。

みなさんは「つなぐ」の言葉から何を連想しますか。私は、地域の人たちとの交流を思い浮かべました。特に私の母校の鱈淵小学校では、地域の人との交流の機会が多いです。その中にふるさと学習があり、地域の人たちから鱈淵の歴史や文化、自然について教わります。そのおかげで、私は地元大好き人間に育ちましたが、鱈淵小学校ではどうしてふるさと学習がこんなに盛んなのでしょうか。その疑問を解消するため、私の小学校当時を振り返りつつ、ふるさと学習に行ってみました。

「どが演者の身内か知り合いです。演目が始まって驚いたのは、演者が小学生だったことです。そういえば、私が小学生だったころから神楽をやる子はいたなと思いいました。ふるさと学習に限った話ではなく、子供たちが地域の文化に触れる機会が多いことがわかります。

子供たちは凛とした表情で神楽を舞っており、真剣そのものでした。衣装の重さも感じさせない演技に圧倒されます。終わったら、同じ学校の子や家族に褒められたのか、とても照れ臭そうにしていました。この神楽を見て、多くの小学生が神楽を始めたら良いと思います。

唐川神楽とは、1825年出雲郡今在家（現在の斐川町今在家）の広瀬正庵に教えられ、始まったとされています。演目は七座12段、神能8段があり、唐川自治会によって韓竈神社の例大祭前夜に隔年で行われています。2018年には出雲市指定無形民俗文化財に指定されました。この文化を引き継ぐため、子供も神楽に参加しています。

小学生から大人まで幅広い年齢層が神楽に関わり、みんなを楽しませています。



- ① 拜殿前で獅子舞
- ② 当家の荒木さんのお宅
- ③ 景気づけの一献
- ④ 切れ目の入ったしめ縄
- ⑤ 健康祈願に獅子舞に噛んでもらう
- ⑥ やった！家に飾ろう
- ⑦ 激しい神事華取り

【地域でつながる 韓竈神社例大祭】

11月3日、韓竈神社の例大祭に行ってきました。今年の当家は荒木さんの家です。当家に選ばれた人は1年間、祭りに関わる人のお世話をします。例大祭当日、お祭り関係者は荒木さんのお宅でお昼ご飯を食べました。

お祭りは当家の敷地内で唐川獅子舞を披露した後、伴内がしめ縄を切ることで歩き出します。しめ縄を切るのは難しいらしく、切れ目が入ってしまいました。今回は無事何とか一発で切れたため、スムーズに進行しました。そして、伴内の後に獅子舞や神事華が付いていきます。

韓竈神社の例大祭は韓竈神社拜殿で行われ、皆そこまで歩いて行きます。その道中、子供は伴内に追いかけられたり、獅子舞に頭をかまれたりします。幼少期はこれが本当に怖く、わたしも祭りの日は逃げ回っていました。親に獅子舞や伴内の前に連れていかれたときは本気で恨んだもの

です。

お祭りの楽しみといえば、神事華を取ることです。伴内が神事華の付いた竹を切り倒します。神事華を家に置いておくとよいとされており、みんなが手に入れようと必死です。そのため、大人も容赦なく、子供が神事華を手に入れるのは昔も今も変わらず難しいです。ちなみに私は撮影のみに徹していたのですが、偶然手に入りました。早速家に飾ろうと思います。

そのあと、拜殿の前で唐川獅子舞が披露されました。ただ、昨晚の神楽披露が深夜2時まで続いたためか、みんな眠たそうで、誰かが寝たら、隣の人が肘でつついていました。この祭りのハードスケジュールぶりが見られます。

休憩中は今回のお祭りで寄付した人の名前が呼ばれました。寄付の内容は大げさに誇張され、使われる名前もアイドルや俳優などの名を使っているのを盛ります。最後まで聞いてやっと寄付した人の名前がわかるという様子でした。

常に和やかな雰囲気です。祭りは進行し、無事終わりました。



①



②



③



④



⑤

- ①三極拾ったよ
- ②遠足楽しいな
- ③杉の木とっても高い
- ④コミュニティセンター長から歴史のお話
- ⑤岩船に乗ってみた

【みんなで行こう、 韓竈神社】

11月12日、韓竈神社へ行きました。

ふるさと学習として鱈淵保育所の園児12名と鱈淵小学校の生徒28名、それぞれの教員と鱈淵コミュニティセンター長が韓竈神社に向かいます。私たちもそれに同行させていただきました。

韓竈神社の駐車場から進み、森に入ります。長い木の間から陽の光がこぼれ、とても神聖な空気に包まれています。子供たちは遠足が楽しいのか、歌ってみたり、周りの景色についておしゃべりしたりしていました。

途中足を止めて、コミュニティセンター長から歴史の説明が入ります。鱈淵が三極みつまたで紙を作っていたことや鉾山の町だったことなど、その場にあるものを見ながら話されました。みんな熱心に聞いたり、三極の実を拾ったりしました。

韓竈神社は素戔嗚尊を祀っています。石段の下には素戔嗚尊が乗ってきたとされている岩船があり、「岩船に乗るぞー！」の掛け声をき

けにみんなで岩船に乗りました。岩船の下に川が流れており、岩が落ちこちないかみんなでドキドキしながら乗りました。

石段は300段以上あり、かなり登らなければなりません。また、石段が幼稚園児とほぼ変わらない高さで、その上苔が生えてつるつるしているため、足場がとても不安定です。「こわい」「しんじやう」と叫ぶ子もいれば、「来たことあるからへっちゃら」と自信ありげな子もいました。途中、手すり代わりに紐がないところもあり、本当にこれみんな登れるかと心配になりました。

韓竈神社の社に入る前には、大きな岩があります。その岩の隙間をくぐって進みますが、とても狭く、暗いです。私の母が安産祈願に妊娠中にここへ登り、隙間を通りました。正気の沙汰とは思えない行為ですが、多くの人が願いごとをかなえに来ます。「願いごとを思い浮かべながら隙間を通るとかなう」とされてお

り、私が小学生のころも一生懸命登りました。今は「きれいな心の人だけが隙間を通れる」とされ、少しずつ変化しているようです。子供たちに願いごとはなにかと聞



①狭い隙間を園児がすいすい

②石段なんと300段！頑張っで登ろう

③社の奥の洞窟

④小さいからだだと降りるのも一苦労

⑤願い事をノートに記そう

くと、「卓球がうまくなれますように」「アイスクリーム屋さん」など夢や目標から「1万円たくさん」と現実的な答えももらいました。みんなの願いがかなうことを祈ります。

社の奥は洞窟になっており、そこを抜けると景色を一望できます。かなりの高さから下を見下ろすので、少し怖いですが景色も圧巻です。みんな叫んだり家のある方を指差したりしました。

戻るときは下りのため、足を滑らせる子が多く、「ひえー」と声をあげたり、「気を付けて、ここ滑るよ」とお互いに声かけあったりしていました。特に幼稚園児は石にしがみつ きながら一歩一歩降りていきました。

降り終わった子に韓竈神社めぐりの感想を聞くと「あぶないよ、ここ！」「落っこちるんじゃないか怖かった」と石段の感想が多かったです。他には、「緑がたたくさんあって落ち着く」「神秘的」と大人びた感想もいただきました。私が小学生だったころ、この遠足は楽しい印象しかありませんでした。それは当時の大人たちが、子供が足を滑らせないように常に気を遣っていたからだとい

思います。今回の韓竈神社めぐりでも、子供たちが怪我しないように楽しめるように教員は目を光らせていました。小さいころから当たり前だと思っていたふるさと学習は、たくさんさんの支えがあつて行われていたことがわかりました。

【ふるさと学習とは】

鱈淵小学校で行っているふるさと学習は、お茶の学習、アサギマダラの観察・研究、唐川川の生き物調査、川下盆踊りと多岐にわたります。当時、私が鱈淵小学校に通っていたころと若干違いがありますが、ほぼ変わらぬふるさと学習が続いています。

これらのふるさと学習では、積極的に地域の大人が子供たちへ教えます。その中でも鱈淵コミュニティセンターでは、ほぼ毎月、小学生のふるさと学習の場を設けています。昔はこれを当たり前のことだと思っていたのですが、今ではとても貴重な体験だったと知りました。



- ①わにぶちふるさとカルタ
- ②鱈淵コミュニティセンター長の高橋一夫さん
- ③鱈淵ふるさとMAP

【鱈淵コミュニティセンター長の高橋一夫さんに聞きました】

いつからふるさと学習は始まったのですか。

——自分がセンター長になる前からこのふるさと学習はあり、（ふるさと学習をする）流れはありました。いつからか正確な年はわからないです。

私が小学生になった時から高橋さんはセンター長なので、少なくとも15年前にはもうこの流れがあったということですね。

——そうですね。長い期間コミセンはふるさと学習の役割を果たしてきました。

どうしてふるさと学習はこんな熱心に行われていると思いますか。

——地域のみんなが鱈淵を語るように、鱈淵を好きになれるようにするためだと思います。

子供たちにふるさと学習をするのとことしてみんなが鱈淵を語るようになるのですか？

——地域の年配の方が子供にふるさと

と学習をする。そうしたら、子供たち

ちは知ったことを親に教えたくなる

でしょう？ すると、親も、ふるさと

と学習を受けていなくても地域のこ

とを語れるようになります。そして、

みんなが鱈淵の良さを語れるように

なり、鱈淵の良さを再発見すること

ができます。

なるほど。そうやってみんなが鱈淵

のことを知り、鱈淵を好きになるの

ですね。

今回韓竈神社めぐりでたくさん歴史や文化を語っておられたのですが、どうしてそんなに詳しいのですか。

——自分は鱈淵出身で郷土史が好きなので、個人的に調べていました。

また、「コミ誌わにぶち」で毎回歴史を書いていると、地域の人から知らない歴史や文化を教えてもらう機会が増えました。そのおかげで鱈淵の歴史や文化を詳しく知ることができました。

ふるさと学習のために行った活動はありますか。

——最近では、ふるさとカルタやふるさとマップを作り、子供たちもこ

れで遊んでいます。

私が小学生のころにはなかった！

これはふるさと学習にもってこいで

ですね。

——大人の方も子供たちと一緒に遊

ぶことができます。わにっこ大フェ

スタ（鱈淵小学校の文化祭）では、

地域の人たちとカルタ大会を行いました。

私たちもやってみたいと思います！

貴重なお時間を頂きましてありがとうございます。

ありがとうございます。

今回、自分の育った鱈淵地区を取材しました。私が小学生当時、ふるさと学習は地域の良さを知らなかったかと思っていました。しかしそれだけではなく、最終的に地域全員が鱈淵の歴史や文化を知ることができるようになります。また、ふるさと学習は大人と子供の交流する機会が増えるので、地域の活性化につながります。

ふるさと学習は地域の歴史や文化をつなぎ、さらに大人と子供もつないでいく存在だと思います。

（たかせみさき）

「山陰」という負荷をかけて

ギフトショップ

YUTTE

(松江市)

山口香穂里





今回の特集テーマは「つなぐ」。島根県といえば「縁結び」ですよ！今回私が取材を行ったのは、「縁結び」が名前の由来のギフトショップ YUTTE さんです。松江市天神町のビルの一角に店舗を構えており、∞のマークが刻まれたガラス張の扉からは、たくさんのお陶器が見え、木

の温もりも感じます。YUTTE の代表である売豆紀拓さんにお話を伺いました。「やりたいことや自分が楽しいと思うことをやる」その言葉の裏側にある強い思いを聞くことが出来ました。

2016年に開店したギフトショップ

売豆紀拓さんは、島根県出身です。地元の高専に通い、その後東京に上京。バイトやバンド生活を送っていたそうです。2014年に帰郷し、2年後の2016年、生きていくために引き出物サービスを始めました。インテリアが好きだった売豆紀さん。そのこともあり工芸品に興味を持つようになったそうです。

2016年、引き出物サービスとして始まったYUTTE。自身の結婚式で売豆紀さんが作った引き出物が好評で、モノを見たいという声があったことから現在の事業がスタートしました。引き出物やオーダーメイドのサービスはオープン当初から今も続いています。主に結婚や出産祝いの品、記念品などを扱っています。オーダーメイドの商品は、オ

リジナルの箱に入って手元に届きます。YUTTE の名前の由来は、縁結びから来ており、「結う」から「結つて」と変化し、「結ぶ」を気付けさせないように入れたいということから YUTTE になったそうです。ロゴの∞は、「続いていくこと」を表しています。現在は売豆紀さんと女性スタッフの二人で運営。店舗には工芸品だけでなく、厳選された調味料やジャム、食品なども売られています。商品選びの基準やこだわりについて聞いてみました。

商品セレクトのこだわりは？

商品選びの基準やこだわりとして、まず工芸品は、実際に目で見て

セレクトしているそうです。窯元は、出西窯・袖師窯・白磁工房・湯町窯の4種類。全て島根県の窯元です。「デザインの良さ・実用性があるか」の2点をいいものの基準としているようです。商品には、この窯元であるかが分かる説明書きがありました。人の紹介や、前から興味を持っていた人に交渉をして陶器を選んでいくことですが、お客さんから情報をいただくこともあるそうです。食器以外にも、開店祝いに送る招き猫や箸置きなどがありました。しかし需要が少ないものもあるそうです。

売豆紀さんは工芸品だけではなく食品にもこだわっています。食べ物を選ぶ基準は、食べてみて美味しい





■ (左上) 詰め合わせギフト (上中央) 取材の様子 (右) 皿やグラスが並べられている (左下) 白磁のコーヒーカップ
(下中央) ロウソク立てが気になる取材班



■ (上) 商品の招き猫 (下) 厳選された醤油やポン酢

かどうか。そして、商品を一つに絞って販売しています。明確な違いがない限りは、1品目1商品にしているとのこと。その理由は、販売する時に説得力を持たせるため。例えば、「醤油はどれがいいですか」と問われた際に、それぞれの商品の良さを説明するだけでは、結局どれがおススメなのか分かりません。そのため、1つの醤油に絞ることでも誰もおススメであると分かるようにしています。逆に、いいと思うものが少なかつた菓子類の商品はほとんど置いてありません。棚を整えるために、いらぬ物を無理に置かないようにしているそうです。バリエーションは多くありませんが、その分ラインナップを整えて1つ1つの商品を濃くしています。

もう一つのこだわりは、「山陰」という負荷をかけて制限することだといいます。お店の扉にも「SAN IN SELECT BUSINESS」と書かれてありました。ですが、何でもかんでも島根のものを集めている訳ではありません。それだと誰でも出来ますし、まんべんなく公平に選びがちになります。選ぶ側は、何の商品がいいのか分からなくなってしまうですね。自分の視点を元にフィルターをかけることで、いいものを厳選することが出来るそうです。そのため、窯元もデザインのよりに洗練されている東部のものがセレクトされています。

「山陰」という負荷をかけて制限する

売豆紀さんがやりがいを感じる時

やりがいを感じる時とはどのような時か伺ったところ、「新しいアイデアが思い浮かんで走り出した時」と答えて下さいました。丁度テーブルの上には、開発中の植木鉢が置いてあります。鉢に使っているのは食器には向かない石見の陶器。自分が欲しいから作る。それが結果的に窯元の産地を救ったり、お客さんに喜んでもらえたりしたらうれしいと



おっしゃっていました。

実はYUTTEの店舗運営以外にも携わっているそうです。ビルの空きスペースを活用しようと店舗の2階でギャラリーを開催されています。現在は不定期ですが、今後は月に1回にするなど定期的に開催したいとおっしゃっていました。それだけでなく、民藝館の運営もされています。広告やデザインの仕事もされています。広告やデザインの仕事もされているとおっしゃっていました。いろんなことをやりすぎて大変という言葉も…。これからはそれぞれの業務を少しずつ育てていくということです。



島根県の窯元は人気も需要もある

皆さんは、島根県にある窯元を知っていますか？ 実は、島根県は陶器で有名なんです。西は石見焼で東は出雲焼に大別されます。島根県の窯元は人気や需要も高く、生産力もあります。また、日本だけではなく海外からの人気もあります。私自身、陶器は何となく大人が使うものというイメージがあり、あまり陶器に触れる機会がありませんでした。ですが今回YUTTEさんの取材を行い、「堅いイメージ」から「温もりのあるもの」へと変化しました。手に取って見ることで工芸品の魅力を知ることが出来たように思います。その中でも、私は写真(左上)の豆皿のセットが好きです。色違いでかわいいデザインが目を引きました。このようなお皿がギフトで贈られたらとても嬉しいです！ 送った先の顔が見えないからこそ、温かみのある工芸品が贈り物にピッタリなのではないでしょうか。皆さんも、お気に入りの陶器をYUTTEで見つけてみてください！

(やまぐちかおり)

店舗情報です。

〒690-0064

島根県松江市天神町1-1

田中殖産ビル1-A

TEL 0852-67-5492

営業時間 11時～19時

定休日 火曜日・水曜日

少し離れたところに駐車場もあります。



ここは未来の世界遺産

～入間交流センター～

(雲南市掛合町入間)

柳楽敏明



私がつ通っていた小学校は全校生徒が少なく一時は廃校も噂されてきました。現在は人数も少し増えて廃校にはならずすみましたが、過疎化が進む現代では母校が廃校になるというのは私にとって決して他人事ではありません。実際に島根県では多くの小学校が閉校や統合になっています。自分の小学校時代の経験と、古民家再生や建物リフォームに興味があることを合わせた取材先として閉校になった校舎を利用して場所を取材したいと考えました。

調べるうちに、人間交流センターという施設のホームページを見つけました。そこは島根県雲南市掛谷町にあった人間小学校の廃校舎を利用した施設でした。宿泊も出来て、月に一度はカフェを開かれているということも分かり、取材場所は決定!! お電話をして取材のお願いをしたところ、快く許可を頂きました。こうして私の取材スタートです。



取材

11月27日(水)。この日は、宿泊や月一カフェではなく、お話を聞かせていただくために人間交流センターを初訪問。他の学生の都合もあり一人で行くことになり緊張していました。しかし、お話をしてくださいの予定の職員お二人が、取材日を間違えて隣町に食材を買い出しに出られているというハプニングがあり、一瞬で和やかな気持ちに。帰ってこられるまでの間に、もう一人の職員の藤原さんが施設の案内や施設を使って行われる行事などを紹介してくださいました。

買い出しから帰ってこられた二人の朝山さん(お二人の仲のよさからずっと親子だと勘違いしていました)にもお話を伺いました。

まず、なぜ閉校した校舎をリフォームして利用することにしたかを伺うと「地域の方の寄る場所を作りたいかった」とのことでした。提案した当初は賛成と反対の人数はちょうど半々くらいに。反対の方の意見としては「費用はどうするのか?」「誰が管理するのか?」などの不安の声があったそうです。その不安を

払拭するために説明会を何度も開かれました。また、雲南市の「農山漁村活性化プロジェクト」という事業に応募して通れば、住民の方の費用的な負担はなくなるという説明などをして、少しずつ賛成を得ていけたそうです。そして、見事に応募に通り、現在の人間交流センターが誕生しました。

多彩な利用活用

交流センターでは様々な人が多種多様な活用をすることが可能です。

6月には、人間と波多の二つの地区の小学生が集まる「通学合宿」という行事があるそうです。ある週の月曜日から土曜日まで交流センターに泊まりながら小学校に通います。児童たちで自炊や掃除などをします。その際には、職員の方だけでなく、地域の方もボランティアとして参加されるとのこと。

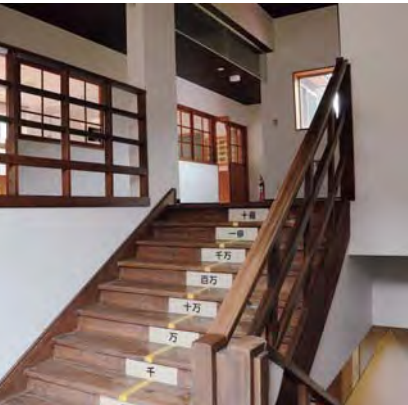
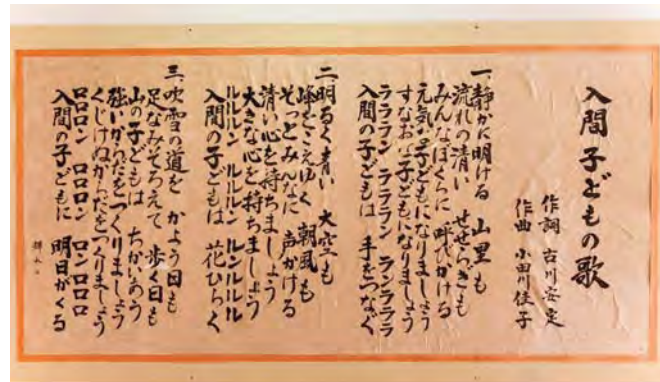
また、夏には松江の児童クラブの子供たちがきて「林間学校」も開かれます。児童は学校の前の川でヤマメの掴み取りをしたり、ピザの生地を作ってピザ窯で焼いて食べたりする体験ができます。大学生の利用もあり、島根県立大学松江キャンパス

の人間文化学部の学生は、交流センターが所有する田んぼで棚田植えを体験させてもらっています。中国やベトナムから技能実習生として日本に来ている方々も日本語の勉強と仕事の専門用語の勉強合宿のために使われています。県外からの利用者も多く、今年も沖縄や青森などの遠方からお越しになっています。

季節によっては、畑での野菜作りなどの体験もできます。広いベランダではバーベキューセットも用意されていて、焼き肉はもちろん川で釣った魚も焼いて食べられるのと。

冬は雪の関係でイベントなどの予定を立てづらいとのことでしたが「今後は冬にも楽しんでもらえる企





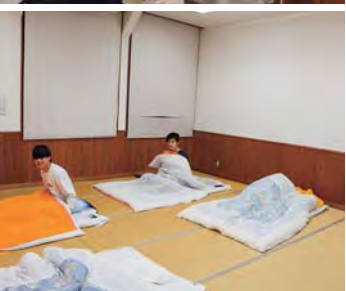
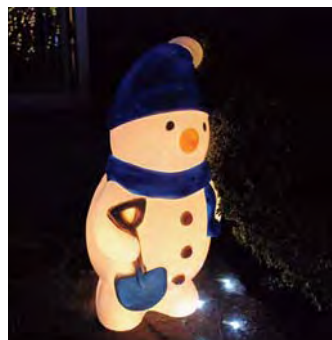
■ (上段左) 卒業生から寄贈された時計。(上段中) 囲炉裏付きの茶室。(上段右) 入間子どもの歌。
 (中段左) 閉校前に教室として使われていました。(中段中) バーベキューなどができるベランダ。
 (中段右) 学校前を流れる魚も採れる川。
 (下段左) ピザなどを焼く窯。(下段中央2つ) 唯一、以前のまま残されている階段。(下段右) 給食で使われていた食器を利用した照明。

画を計画したい」と言っておられま
 した。

ピコットさん

食事については、地元の食材を
 使った料理を提供されていると聞き
 ました。私は料理も職員の方が作っ
 ておられると思っていました。しか
 し、お話を伺うと「料理に関しては
 すべて『ピコット』というボランティア
 アグループが作っています」とのこ
 とでした。ピコットさんのメンバ
 ーは4人で、調理師が3名・管理栄養
 士が1名で構成されているそう
 です。驚いたことは、資格を持って
 いる人が集まったのではなく、集ま
 った人がたまたま資格を持っていた
 ということです。そのことについて「会
 うべくして会った」という言葉は非
 常に印象に残りました。

地元の食材を使われるだけでな
 く、各自の家で作った野菜を持ち
 寄って漬物も作られるそうです。そ
 して、全ての料理を手作りされて
 いるということで、「冷凍を買ってき
 て揚げるだけのようなことは一度も
 したことはないです」とのこと。手
 間を惜しまずに、来た方いい食
 事を提供したいという気持ちがとても
 伝わります。



宿泊

12月10日(火)、宿泊と翌日のカ

食事のメニューについては二週間前くらいから4人で集まって決めていけます。また、前に作った料理とは重ならないように写真に撮ってスナップにされるほどにこだわりを持っておられます。メニュー決めの話は脱線してしまうけどね」と笑いながら言われていました(笑)。何よりも「みんながこの活動が好きで楽しんでしてる」ということが素敵だなと思いました。

フェに行くため、男子学生4人で授業が終わってから出発。着いたのは午後9時前。着いた瞬間に飛び込んだのは綺麗に裝飾されたイルミネーションでした。山間部の夜でも寒かったにもかかわらず、気づけば約20分間もはしゃいでいました。中に入ると、木を基調にリフォームされた綺麗な施設に男子のテニションはさらに上がりました。

宿泊の際は、自炊をするか、地元の食材を使った食事をピコットさんに作っていただくかを選ぶのですが、到着時間が遅くなるために自炊を選ぶことにしました。しかし、「カ

レーや味噌汁なら作っておいてあげるよ」と言ってくれださり、お言葉に甘えて特別に作っていただいていたように丁寧に紙に書いて貼ってあり、男子一同ただただ感動しました。カレーライスには、お肉はもちろん、アサリやイカなどシーフードも入っていてとても美味しかったです。もちろん全員がおかわりをして大満足の夕ご飯でした。大盛りを二杯食べた一人の学生は、そのまま幸せそうな顔で就寝し朝まで起きてきませんでした(笑)。

月一カフェ・あいあい

交流センターでは毎月の第2水曜日に「月一カフェ・あいあい」が開

り、かくれんぼをしたワクワク感は今でも忘れられません。寝る前の穏やかな空間のなか、今までは話さなかったようなことをお互いに語り合いました。思い出すと少し恥ずかしさもありますが、気持ちを開放できる不思議な力が人間にはあるのかなと感じました。いや、あります(断言)。

■(上2段)ライトアップされたイルミネーション。(中2段)特別に作っていただいたカレーライスとみそ汁。(下2段)片付けや談笑したり、学校散策からのおやすみなさい。

かれています。

もともとは高齢者の方の「引きこもり防止」で始められたそうです。

最初の半年間はお茶やデザートなどを出すだけだったそうですが、「ワンコインでランチを提供できないかな？」という発案から今のランチを提供するスタイルが始まったそうです。

朝8時過ぎには、ピコットさん、職員さんは既に来ておられました。かたや私たちは未だ布団のなかにもいました（反省）。

ピコットさんは、ランチの時間間に合うよう準備を進められていきます。真剣な眼差しで料理を作られる姿がかつこよかったです。職員さんも、食器出しや飲み物の準備でとても忙しそうでした。

カフェは午前10時からスタートですが、9時過ぎあたりからお客さんはぞくぞくお越しになります。また、雲南市の「シマシマしまね」さんというお店がパンやハチミツなどを販売され、ランチの前にはお客さんが並んで購入されており、とても賑わっていました。

お客さんにもお話を伺うことができました。町内の方で毎月必ず来る

という方や、中にはfacebookを見て初めて来たという市外からの方も。

全員が人間小学校出身だという3人のお客さんにお話を聞けることに。一人は5か月のかわいい赤ちゃん連れでした。「ワンコインでこんなに手の込んだ美味しい料理が食べられるのは凄い」「集まって話せる良い機会」とおっしゃいました。また、当時の小学校のお話も聞けました。皆さんが在籍されていた時から

人数は少なかったために閉校の覚悟はしていたけれど、やはり母校が閉校した時は悲しかったそうです。しかし、交流センターができてカフェはもちろん、様々な行事がこの場所で行われて人が集まれる機会があるから嬉しいと言っておられました。「過疎化は進んでいるけど、ここにあるから人間も賑わいが保たれている」という言葉は印象的でした。

月一カフェと同じ日には、不定期に行われる地域の高齢者向けの「サロン」という催しが開かれています。この日は、雲南市役所から来られた森脇さんという方が健康にとって笑うということの大事さをお話されたり、「マットス」というゲームをさ



■（上段左）投げる前に「Enjoyo・マットス!!」と元気よく手を挙げてから投げる。（中段・下段）マットス風景。（上段右）森脇さんのお話。

れていました。急遽の取材にも関わらず快く受け入れてくださりゲームにも参加させてもらえて嬉しかったです。

「マットス」とは重さの違うお手玉のような四つの球を、点数を書いて床に敷かれたシートに投げるといふゲームです。皆さん始まる前は遠慮がちだったり、恥ずかしがったりされた様子でしたが、いざ始まると真剣になり一喜一憂。難しさと楽しさ、そして年齢を問わず参加できるゲームに夢中になり、終わった時に

は皆さん笑顔でした。

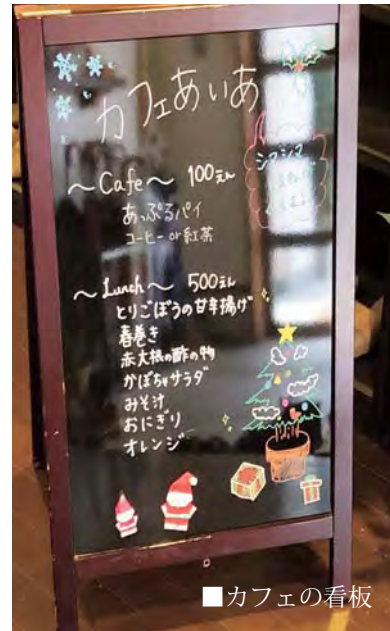
取材をした後は、待ちに待ったランチの時間です。綺麗な彩りで一品ずつとても丁寧に作られていて、「春巻き」は皮がパリパリとモチツリの両方の感覚が楽しめて、中の少し甘めの具材との相性が抜群。自宅で採れた野菜で作られた「赤大根の酢の物」は、酢っぱ過ぎずとても優しい味です。「とりごぼろの甘辛揚げ」は特に全員に大好評で、ご飯が足りないくらいでした（笑）。とても美味しかったので後日、家で自分



■絶品カフェランチ



■シマシマしまねに並ぶお客さん



■カフェの看板



■ピコットのみなさん

で作ったのですが……当たり前ですが、あまりの味の違いに愕然でした(笑)。

ピコットさんには、「料理を見て感激してもらって・食べて笑顔になってもらって・お帰りの際には健康になってもらう。そして、それを折っています」という、モットーにされている言葉があります。まさに、モットーどおりのおもてなしをしていただきました。

皆さんにも是非ピコットさんの作られるランチを食べていただきたいです。

料理を作り終えて、皿洗いなどの片付けされている時にはピコットさんの安堵と達成感を感じました。その時には私たちがも取材ということをお完全に忘れて、ピコットさんとお話を楽しみました。

取材を通して、廃校を利用するということとは建物を蘇らせることだけではないと強く感じます。「地域の方が寄る場所を作りたかった」という当初の思いを超えて、様々な場所から人が集まる場所になっていました。

間違いなく過疎化は進んでいます。しかし、この交流センターがな

ければ生まれない出会いや繋がりは数えきれないのではないのでしょうか。

帰りの車の中、「また4人で必ずここに来よう」と全員で約束しました。

(なぎらとしあき)





コウノトリがやって来た！

(雲南市)

河原俊平

雲南市立西小学校より提供写真

4羽の雛の写真



西小学校教頭の山本芳正先生（右）と筆者

令和元年度、文化情報誌がリニューアルして、雑誌のタイトルが「ひだまりのおと」になりました。そして、今年の特集のテーマは「つなぐ」です。筆者は子どもの頃から生き物が好きだったので、絶滅危惧種にスポットを当てて、絶滅危惧種が人と人をつなぐ、そして絶滅危惧種を未来につなぐというテーマで記事を書くことにしました。

そこで現在の島根県の絶滅危惧種を調べてみると、なんと約950種類もの絶滅の恐れのある生き物たちがいることが分かりました。しばらくリストを眺めていると、その中の「コウノトリ」という文字が目に残りました。山陰のニュースで耳にしたことがあるなど思いながら、さらに調べてみると、雲南市立西小学校でコウノトリを活用した取り組みを行っているようでした。筆者は、この取り組みには「つなぐ」に関わる何かがあると直感し、取材して記事にすることにしました。

令和元年12月4日（水）、雲南市大東町仁和寺（にんなじ）にある雲南市立西小学校を訪問しました。西小学校は、春殖小学校と幡屋小学校を統合して、昭和54年に開校しまし

た。令和2年には開校40周年を迎えます。令和元年度現在、児童数は153名です。

田んぼに囲まれた小高い丘の上にある西小学校に着くと、まず目に付いたのは、校庭の端に建っている「人工巣塔」です。高さは約12メートル、頂上には直径約1.6メートルの円形の巣台が取り付けられています。そして、校長の野津勇先生と教頭の山本芳正先生が出迎えてくださいました。

本稿は、山本先生からお聞きした内容をベースにして、後日、前校長の和田邦子先生からお伺いした内容を適宜加えながら、まとめていきます。西小学校のホームページも参考にしました。

一度は絶滅したコウノトリ

コウノトリは、翼を広げると約2メートル、立った状態での高さは約1メートルにもなる大型の鳥です。全身の羽毛は白色ですが、翼の後方



雲南市立西小学校



校庭にある人工巣塔



昇降口の窓

および先端部（風切羽）は黒色で、飛行時には白黒のコントラストがとてはつきりしています。約26センチもあるくちばしは黒色で太く、足は綺麗なピンク色をしています。目の周りが化粧をしたように赤いのも、コウノトリの特徴です。

コウノトリは、河川、池沼、湿地などに生息しますが、日本では、水田や水路のある里山を好んで生息しています。肉食性で、ドジョウやフナなどの魚類をはじめ、カエル、ヘビ、ザリガニ、バッタ、ネズミなど多様な動物を食べます。それも、なんと1日1キロも餌を食べるのだそうです。つまり、コウノトリが生

息できるのは、自然がとても豊かな地域だけなのです。

江戸時代までは日本中に広く分布していたコウノトリですが、明治時代の乱獲のせいで、兵庫県と福井県の個体群を残して他の地域では絶滅してしまいました。しかしこれらの地域でも、第二次世界大戦から戦後にかけて減少を続け、昭和46年（1971年）にはついに絶滅してしまいました。

その後、中国やロシアからコウノトリを譲り受け、国内で繁殖させる試みが続けられ、平成11年にはコウノトリの野生復帰を目指して、「兵庫県立コウノトリの郷公園」（豊岡市）が開園しました。そして平成17年には、同園で育った個体が初めて放鳥されました。世界初の試みです。それ以降も放鳥は行われ、平成30年現在、144羽が野生に復帰しています。

それでも、日本の環境省は、コウノトリを最も絶滅の恐れの高い「絶滅危惧ⅠA類」に指定しています。

コウノトリ「げんきくん」が来た！

そんな稀少なコウノトリが、平成29年3月、島根県雲南市にやって来

たのです。

雲南市にやって来たコウノトリはオスで、「げんきくん」という愛称で呼ばれています。げんきくんは、平成26年6月14日、福井県越前市の飼育施設で生まれました。約6カ月間、兵庫県豊岡市のコウノトリの郷公園で野生復帰するための訓練を受けた後、平成27年10月3日、福井県越前市で放鳥されました。

放鳥されてから、げんきくんは居場所を探して、北は宮城県から南は長崎県まで、移動を繰り返しました。一時は朝鮮半島まで行って、約7カ月間滞在しています。その後、1年以上に及ぶ大旅行の末に、平成28年11月、げんきくんは雲南市大東町にやって来ました。そして、翌平成29年3月には、「ななちゃん」と呼ばれるメスとペアになり、西小学校の近くの電柱で、営巣を始めました。

「校長先生！ コウノトリのげんきくんが学校近くの電柱で巣をつくっていますよ」。当時の西小学校の校長だった和田邦子先生は、「生き物好きで、鳥好き」だったので、以前から生徒たちに学校周辺の野鳥について情報提供をしていました。そんな和田先生は、この報告を聞き

て「感動で心浮き立ち」ました。コウノトリはとても魅力的な鳥なので、身近に起こったこの出来事を活かして、西小独自の魅力的な教育ができる直感したのです。

平成29年4月、ヒナが4羽も誕生しました。和田先生は、新しい年度の始まりとともに早速行動を開始します。まず、先生たちに呼びかけて、「コウノトリ・プロジェクトチーム」を立ち上げます。次に、4年生と6年生の総合的な学習の時間を使って、コウノトリを題材にした学習を始めます。最後に、全校活動の時間を、子どもたちが「自分たちがコウノトリのためにできること」を考え、実行する時間にしました。

げんきくんとひなたち応援プロジェクト

そんな矢先、平成29年5月に、母鳥のななちゃん、サギと間違われて撃ち殺されるといふ事件が起きました。そして、父鳥のげんきくんだけで4羽のヒナを育てることは難しいと判断され、ヒナたちは兵庫県のコウノトリの郷公園で保護されることになったのです。

この事件が、子どもたちのやる気に火をつけました。事件の翌6月、子どもたち自身がコウノトリの学習や活動を計画し実施する、「げんきくんとひなたち応援プロジェクト」(以下「応援プロジェクト」と略)

が立ち上がります。

子どもたちが話し合ってきた最初の全校活動が、「コウノトリ見守りボード」でした。これは、西小学校の周辺地域の航空写真をボードに貼り、コウノトリを目撃した場所に目撃した日付けを書いたシールを貼っていくというものです。児童だけでなく、地域の方々にも協力してもらって目撃情報を集め、その情報を地域全体で共有していくことを目的としています。

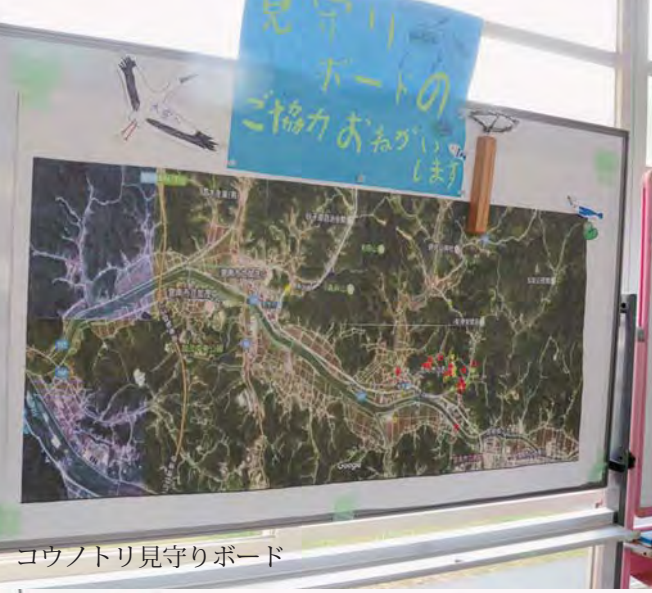
実際に校舎の中にあつた見守りボードを見せていただきましたが、シールを通して誰でも簡単にコウノトリの目撃情報が分かるようになっていきます。この「見守りボード」が、コウノトリと子どもたちを、そして子どもたちと地域を「つなぐ」ための第一歩となりました。

その後、西小学校とコウノトリを結びつける出来事が重なります。7月12日、豊岡市で保護されていた4羽のヒナが、雲南市に戻ってきた放鳥されました。放鳥式には、西小学校の児童も全員が参加しました。そして11月28日、今や西小学校のシンボルとなっている人工巣塔が校庭に設置されます。人工巣塔は、

コウノトリの生態調査などを行うNPO法人「コウノトリ湿地ネット」(兵庫県豊岡市)が寄贈してくれました。西小学校は、世界で二番目の人工巣塔のある学校になったのです。

巣塔設置の翌12月から始まった全校活動が、「一人一校運動」です。子どもたちが自分たちにできることは何かを話し合った結果、げんきくんが巣をつくるための材料(木の枝)を集めるお手伝いをしようということになったのです。子どもたちは、げんきくんが巣塔で営巣してくれることを願って、くちばしでくわえやすいように集めた枝を平たく広げて置くなどの工夫をこらしました。

平成30年2月21日、児童たちが待ちに待った瞬間が訪れました。ついに、げんきくんが巣塔におり立ったのです。「巣塔を一心に見つめる、各階の窓際に並ぶ全校児童の嬉しそうな顔」、和田先生の言葉から子どもたちの感動が伝わってきます。その後、げんきくんは「ボンズニ」という新たなメスのペアを得て、今度は巣塔の上で、二回目の営巣・子育てを行います。



コウノトリ見守りボード



5年生のチャレンジ田んぼ



6年生にインタビュー



望遠鏡と一眼レフカメラ



コウノトリの実寸パネル



全学年で取り組むコウノトリ学習

平成30年4月、げんきくんが雲南市に来てから2年目の春、西小学校のコウノトリを題材にした教育は、一段とパワーアップします。4年生と6年生の総合的学習の時間を使っていた取り組みを全学年に広げ、各学年に応じた学習内容を盛り込むことにしました。

1、2年生は、生活科の時間に「コウノトリとなかよし」という単元(学習内容)に取り組みます。コウノトリになりきって学校の敷地内にある「いわくまの森」で遊んだり、地域の田んぼで餌を探したり、木の枝を集めて巣作りに挑戦したりします。子どもたちが、コウノトリへの興味や関心、愛着を持つことがねらいです。

3年生から上は、総合的な学習の時間を使って、より高度な内容に取り組みます。3年生のテーマは「コウノトリっていったいどんな鳥？」で、コウノトリに関する自分たちの疑問を調べていきます。4年生のテーマは、「どうしてコウノトリは西小周辺に来たの？ 自分の『説』をたてよう！」です。本や資料に加えて関係者への取材も行い、根拠を

元に自分たちで考え、調べたことを地域へ発信します。

5年生のテーマは、「人にもコウノトリにも安全・安心な田んぼづくりに挑戦！」です。地域の人に協力してもらって、学校のすぐ北側に「幸せ運ぶチャレンジ田んぼ」と名付けた田んぼをつくり、コウノトリの餌になる生き物を育みながら米作りを行います。

6年生のテーマは「コウノトリと共に生きる西小6年生の提言」で、コウノトリ学習の集大成と呼ぶべき内容です。コウノトリ絶滅の理由、野生復帰の歴史やそこに掛ける人びとの努力と思いなどを踏まえて、コウノトリとともに生きることができると地域づくり・町づくりに向けた提言を行います。

1年生から6年生までの6年間をかけて、コウノトリを通して生き物への愛着を育み、生態系や人と生き物との共生について学び、さらに地域づくり・町づくりについて考え・提言する。げんきくんたちがやって来たことを最大限に活かして、子どもたちの興味・関心を高め、思考力や表現力の向上につなげたい。そんな先生たちの思いがにじみ出ていま



雲南市立西小学校 元校長先生 和田邦子さんと筆者

す。

子どもたちの成長

げんきくんたちが来てくれたおかげで、全校をあげた「応援プロジェクト」が始まりました。しかし、コウノトリを学習活動に取り入れることは、そんなに簡単ではありませんでした。コウノトリについても計算ドリルをした方が児童のためになる、校庭にある巣塔が校庭での運動やスポーツの妨げになるなどの声も根強かったです。

しかし、そんな声をかき消したのは、子どもたち自身の成長でした。げんきくんが子育てをしている、

あるいは西小学校の周辺で餌を食べている。そんな稀有な時間をげんきくんとともに過ごすうちに、子どもたちは日々身近で起こることに興味を抱くようになりました。ななちゃん（げんきくんの子ども）がゴミを食べて死んだ……。

自分の身近に「興味の芽」を見出した子どもたちは、自分の疑問を自分で調べ、そこから自分で考えることの楽しさに気づきます。先生たちは、コウノトリ学習のための教材を懸命に準備して、子どもたちの主体的な学習を後押しします。

平成30年5月9日、三瓶自然館から鳥の専門家である星野由美子さんを招いてコウノトリ学習を行ったとありますが、「学校便り」に書いてあります。「時間が足りず、昼休みにも校長室へやってきて星野さんと話し合う5年生。凄く追求・探求心でした！」。星野さんも、「子どもたちの意欲、それを嬉しそうに見つめる先生たちの笑顔に感動した」とコメントを寄せています。

そんな子どもたちは、他人に「やらされる」のではなく、自発的に考へて積極的に行動するようにもなり

ました。

たとえばこんな出来事かと、和田先生が嬉しそうに話してくださいました。例年5月下旬に開催している運動会を、「コウノトリの子育てに影響があるから秋に変更してほしい」と、6年生の代表が校長室まで直訴しに来たそうです。その熱意が学校を動かして、平成30年度から、西小学校の運動会は9月に行われるようになりました。

また、子どもたちは、地域への発信も積極的に行うようになります。

平成29年12月には当時の6年生たちが、「地域の大人の皆さん」への協力を依頼するチラシを作成しています。その中では、「田んぼに水をためる、巣の材料をおく、農薬を減らす、草かりをする、水を汚さない、静かな見守り、ゴミのない地域に」という7項目を掲げ、「コウノトリも人も住みよい地域にしましょう。ご協力よろしくお願いします」と結んでいます。実に堂々とした、直球の提言です。

地域の人びとも、子どもたちの真摯な思いに接して、西小学校の取り組みを理解し、応援してくれるようになりました。

おわりに

今回の取材では、西小学校が行なっているコウノトリに関わる学習と活動を通して、様々なつながり（絆）を発見することができました。コウノトリという希少な鳥が地域に住み着くことによって、小学校の児童たちとの絆が生まれ、その絆が地域の人びととのつながりに広がっていく。それが、地域と人びととの関係を変えていく。

和田先生が、「これは奇跡なんかじゃない。行動したから実行したからこのような出来事が生まれたんだ」とおっしゃいました。コウノトリに選ばれるという奇跡的な出来事を、その一瞬の好機を逃すことなく活かし切った和田先生と西小学校の先生たちに、心からの拍手を贈りたいと思います。

「よけじ」の話やドジョウのDNA鑑定の話など、まだまだ書き切れなかった内容がたくさんありますが、西小学校の取り組みが今後ますます素晴らしい成果を挙げることを祈って、筆を置きます。

(ごうばらしゅんべい)

編集後記

☆一年の収穫が終わり落ち着いた頃、唐突に申し込んだ取材を多久和さんは快く受け入れてくださいました。また、農作業から貴重な話、お昼ご飯までご馳走になり本当にありがとうございました。今回の取材で学んだことをこれからの生活に活かしていきたいです。

(夏)

☆私は春から地元を離れて社会人になります。地元を離れる前に島根県の魅力を改めて知ることができたのは本当に良かったし、伝えていく必要があると思います。

今回、取材をさせて頂いた西小学校の皆さま、和田邦子先生、本当にありがとうございました。いつか必ず自分の目でコウノトリを見たいと思います!!

(俊)

☆雑誌作り最大の衝撃は、一緒に撮っていただいた集合写真や赤ちゃん連れの皆さんの写真を含めた数百

枚のデータが消えたことです。頭の中で「蛍の光」が流れました(笑)。事情をお話して交流センターさんが撮っておられた写真を送って頂きました。ずっとお世話をかけてばかりでしたが、お会いできたことは何より嬉しかったです。ご協力いただいた全ての皆さん、心よりありがとうございました。

(敏)

☆私は2記事を担当することになり、取材や記事の制作に時間がかかりましたが、お世話になった皆さんがいい方ばかりで助かりました。ありがとうございます。トロッコに乗る時は防寒対策が必須だと身にかけて感じました。

本文に書けなかった「つむぎ」さんの連絡先です。

〒699-1221

島根県大東町飯田36-12 出雲大東駅

電話番号

0854-43-8650

代表 雲南市出雲大東駅指定管理者

南波 由美子さん

(香)

☆想像以上の忙しさで、編集に追われる出版社員の気分を味わえまし

た。でも、この短大に入った意義を見つけられた気もするんです。もう、色々な人に感謝です! In Des igit はやっぱり楽しくて、達成感があります。

(夕)

☆今回の取材で私のふるさとの鰯淵に行きました。そのため、小さいころから知っている人たちに改めて取材をすることになり、少し照れ臭かったです(笑)。普段、ふるさとを客観的に見る機会はないので、とても貴重でした。鰯淵の良さが少しでも伝わったらうれしいです。

(高)

☆「のんびり雲」の後継誌をつくる。「文化情報誌制作」という授業を担当する私に託された使命です。当初の履修登録は18名。企画のアイデア出しをしていくと10名を切り、最終的に

(繁)

ひだまりのおと 第1号

2020年3月20日発行

編集 「ひだまりのおと」編集部

責任者 山根繁樹

E-mail: s-yamane@u-shimane.ac.jp

発行 島根県立大学短期大学部

総合文化学科

〒690-0044

島根県松江市浜乃木7丁目24-2

TEL. 0852-26-5525 (代表)

FAX. 0852-21-8150

印刷 今井印刷株式会社

制作指導 大塚茂 鹿野一厚 山根繁樹

ひだまりのひと 森脇美麗空さん

2018年4月、島根県立大学短期大学部総合文化学科に入学した44名の中にいた「もりわきみれに」さん。ミレニアム生まれとわかるお名前です。松江市立女子高等学校国際文化観光科の卒業生で、海外のことを勉強したくてこの学科に入学したそうです。入学後は、海外の文化についての学びはもちろん、さまざまな活動をしてきました。



その中でも最大の活動が「ラオス広報部」の部長です。東南アジア・ラオスの文化や社会課題を伝えるため、まずはラオスという国を知ってもらおうと立ち上げたプロジェクトでした。ラオスに絵本を送ったり、絵本自体を製作したりしたほか、県内の高等学校に向いて高校生と一緒にラオス料理を作る取り組みも行いました。手始めは出身校の松江市立女子高校。先生に連絡を取り、職員会議にかけてもらうための資料を作って説明し、開催にこぎつけました。その後は、同じやり方でラオス広報部員の出身高校を訪ねていき、松江商業高校、松江農林高校、横田高校などでも開催したそうです。ラオス広報部は「しまね大交

流会」にも参加。森脇さんのプレゼンテーションは評判となりました。

STDダンスサークルの部長も務めていた森脇さん。松江市主催の農林水産祭をはじめ、お城まつりや松江市小学校表現運動発表会にも参加したサークルを引っ張りました。

短期大学部総合文化学科で過ごして最も面白かったことを尋ねると、出会った「人」がみんな面白かったと答えました。いえいえ、あなたもじゅうぶんに「面白かった」ですよ、美麗空さん。忙しすぎて授業中に眠くなる日々ももうすぐ終わり。卒業後の活躍にも期待しています。

(山根繁樹)



木次線 おろち号